

日本語学習者のコミュニケーション方略使用に母語話者の調整が及ぼす影響

方 穎 琳

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）

2013年3月発行 抜刷

日本語学習者のコミュニケーション方略使用に 母語話者の調整が及ぼす影響

方 穎 琳*

The Influence of Adjustments by Japanese Native Speakers for Japanese learner's use of Communication Strategies

FANG Yinglin

Abstract

This paper made a quantitative and qualitative analysis of the adjustments performed by Japanese native speakers (JNS) under the situation when Japanese learners with different language proficiency met with a problem of utterance production, and the reactions of learners to such adjustments. It was found that JNS 1) Use a lot of back-channel feedback to prompt the learners' utterance production. 2) Guess the learners' intent to assist the utterance production. 3) Give the sign of a clear understanding when understandings of the utterance produced by learners is prompted. Also the findings show that the adjustments performed by JNS differ with learners with different language proficiency, and JNS's consciousness as a language-host to manage the whole conversation seems to be strengthened.

There are 8 type of the reactions of learners to JNS's adjustments has been observed. All of the learners with different language proficiency showed a strong tendency of using communication strategies (CS) for re-adjustment by using Japanese. Learners with low language proficiency were observed to borrow a common language with JNS temporarily for adjustment, and learners with high language proficiency were observed their consciousness as a language-host to manage the flow of whole conversation might have been strengthened.

From the above results, the adjustments of "promote conversation type" made by JNS offer the opportunities to the learners to use CS for re-adjustment.

Key words: Japanese proficiency level, Communication Strategies, Adjustments by Japanese Native Speakers, Japanese learner's reaction

1. 研究背景

接触場面では、第2言語（以下L2）学習者は意味を伝達する際に、語彙、文法、音韻知識などの言語知識の不足に起因する問題を修復するために、コミュニケーション方略（Communication Strategies、以下CS）を用いる。本研究ではCSを、学習者が意味の伝達を達成するために、不完全な言語知識を補う手段として意識的にとる方略と定義する。

コミュニケーションにおける意味の伝達は必ずしも一方的に行われるのではなく、関係する人々（参加者）の間の交渉によって決まるものである（Savignon 2009: 13）。日本語能力が充分でない学習者を会話相手とする

キーワード：日本語習熟度、コミュニケーション方略、母語話者の調整、学習者の反応

*平成22年度生 比較社会文化学専攻

際、学習者の不完全な言語知識に起因する問題を修復するためには、学習者側からの努力だけではなく、母語話者側からのサポートが必須である。学習者はCSを用いて問題の修復を試みようとするが、実際の接触場面のコミュニケーションでは、CS使用によって問題が速やかに修復されるとは限らず、時には意味交渉¹が長く続く現象が起きることもある(徳永 2000)。例えば、学習者が発話を産出する際に生じた問題を、CSを使用して修復しようとする調整に対して(ターン1²)、母語話者が何らかの問題(「うん?」「~ということ?」など)を示すと(ターン2)、学習者は母語話者の質問に応じ、CSを用いて再調整を試み(ターン3)、母語話者は理解を表明し問題修復の完了を示す(ターン4)。このような連鎖では、学習者による1回目の修復が成功しなかった場合には、問題を修復するために、学習者の意図を推測し言葉の意味を確認したり、言い淀んだ発話を完成したりといった母語話者による積極的な調整が見られる。さらに、このような母語話者の調整が学習者の再調整に影響を与えることが考えられる。

しかしながら、これまでのCS研究は学習者に焦点をあて、彼らが使用したCSの実態に重きを置いてきたが、母語話者が問題修復の過程で行う調整が、次のターンでの学習者の再調整にどのような影響を与えるのか、といった相互作用の視点からの研究はまだ少ない。そこで、本研究では相互作用の視点から問題修復における母語話者の調整が学習者のCSに及ぼす影響を考察したい。

2. 先行研究

母語話者は調整を行う際に、簡略化した言語使用、いわゆる「フォリナー・トーク」を使用する傾向がある。日本語のフォリナー・トークは、1)簡単な文法を用いて基底構造を変形せずに表現したために、重複の多い文になる、2)非常に詳しい、少し丁寧すぎると思われる表現が用いられる、3)日本語では普通省略される一人称代名詞が多用される、という日本語にしか見られない特徴がある(スクータリデス 1981)。そして、ファン(1998)は母語話者は「言語ホスト」として会話に参加し、会話の維持を働きかける特徴があり、会話を維持する責任感を強く感じるほどフォリナー・トークや、話題のコントロールなどの自己調整を行うとしている。

母語話者の調整に影響を与える要因のうち、聞き手である非母語話者に関わる要因として、非母語話者の言語能力という「言語内的条件」と、人種や国籍などの「言語外的条件」が挙げられる(オストハイダ 1999他)。オストハイダの研究では、日本語母語話者は中国人日本語学習者との初対面会話での調整では、「筆談」を使用することと、外来語による言い換えより日本語の漢語による言い換えを多く行うという特徴があることが明らかにされた。

また、非母語話者との接触頻度が母語話者の調整に影響する要因として注目されている。母語話者が非母語話者に情報を提供する際に、接触頻度が高い母語話者のみ「例示」という方法を使用し、言い換えもより具体化されている傾向が見られた(筒井 2008)。一方、母語話者が非母語話者より情報を受け取る際に、接触頻度が高く経験の多い母語話者の方が、(1)意識的にあいづちを多用する、(2)理解表明と理解あいづちを併用する、(3)繰り返し、情報内容の確認を行う、(4)非母語話者の発話困難を察知して積極的に援助を行う、といった特徴が見られた(村上 1997; 柳田 2011)。また、増井(2005)は、接触経験を持たない母語話者の接触経験による変化に着目し、修復的調整には多様な方法・表現の使用が見られるようになったと報告している。

母語話者の調整に後続する学習者の反応について、永田・大浜(2011)は道聞き談話における日本語母語話者の「繰り返し」と「言い換え」に対する受け手の学習者の反応を分析したところ、「応答」、「反復」、「旧情報」、「新情報」、「確認」、「反応なし」の6つの反応タイプが観察された。そして、学習者は母語話者による「繰り返し」を情報が十分に伝達されたと認識するのに対し、母語話者の「言い換え」を情報の伝達が不十分と認識する傾向があることが示唆された。

以上のような研究から、母語話者は言語ホストの役割を果たし、非母語話者の言語能力に応じて調整を行うが、その調整の様態が非母語話者との接触頻度などの要因によって影響されることがわかる。しかしながら、これまでの研究では、非母語話者(学習者)の属性(国籍など)が統一されておらず、L2習熟度も初級または上級のどちらかに限られていたため、同じ国籍でありながら習熟度が異なる学習者に対する母語話者の調整特徴はまだ解明されていない。さらに、母語話者の調整に後続する学習者の反応の一部の特徴は明らかにされたものの、

CS使用を含む反応、つまり学習者の再調整の特徴については、まだ明らかにされていない。

したがって本研究では、習熟度が異なる学習者が発話する際に使用するCSについて母語話者の調整、特に発話に焦点を当てて分析する。つぎに、母語話者の調整に対する受け手である学習者の反応に見られる再調整の特徴について考察したい。

3. 本研究の目的及び課題

本研究では、まず習熟度の異なる学習者が産出の問題を修復するために用いられたCSについて、母語話者が行う調整の特徴を明らかにし、その上で、母語話者の調整に対する学習者の反応を考察することから学習者のCS使用に与える母語話者の影響を検討したい。この2点を目的とし、以下のような研究課題を設定した。

課題1 習熟度が異なる学習者に対する母語話者の調整にはどのような特徴が見られるか。

課題2 母語話者の調整に後続する学習者の再調整にはどのような特徴が見られるか。

4. 研究方法

4.1 データおよび会話参加者

本研究で対象とするデータは、2010年に中国の大学で収集した中国人日本語学習者（24名）と日本語母語話者（12名）の2者間初対面会話の録音・録画データからなる。SPOTテスト（A紙）の得点³に基づき学習者を習熟度の低群（CL）、高群（CH）の2群に分けた（表1）。1名の母語話者はCL学習者、CH学習者それぞれ1名とペアを組んで15分間の自由会話を行い、計24組の会話データ（合計約6時間）が得られた。会話終了後に、CSを確認するために、録画の映像を再生しながら全ての会話参加者にフォローアップ・インタビューを実施した。

表1 会話参加者の概要

	人数	性別	平均年齢	L2習熟度	学習歴	SPOT平均得点 (標準偏差)	接触頻度	備考
中国人日本語学習者	12名	男(6名) 女(6名)	18才	低	1年	44.2 (4.17)	低	日本語専攻； 渡日経験なし
	12名	男(6名) 女(6名)	19才	高	3年	58.8 (2.82)	低	日本語専攻；全員日本語能力試験1級合格；12名のうち、1名が1カ月程の滞日経験がある
日本語母語話者	12名	男(6名) 女(6名)	21才	低～中	7カ月～3年	—	高	中国語を学ぶ短期留学生；中国滞在歴1～6カ月

*接触頻度、日本語母語話者の習熟度については文末注4において説明する。

4.2 分析方法

本研究では、次の手順で分析を行った。

- (1) 文字化資料から学習者の発話に起因する意味交渉の発話連鎖を取り出し、そのうちの会話者双方による発話のやり取り（ターンの交替）が2回以上である連鎖を分析対象とした。
- (2) 問題源となる学習者の発話を特定し、一二三（2002）と柳田（2011）の分析枠組みを参考にして母語話者の発話を分類し（表2）、母語話者の調整の特徴を考察する。
- (3) 母語話者の調整後の学習者の反応について、永田・大浜（2011）の枠組みを参考にして学習者による「再調整のあり／なし」に分けて考察する。
- (4) 再調整ありの反応に現れたCSを方（2010）（表3）の枠組みに基づき分類、集計する。

表2 学習者による問題を修復する母語話者の発話カテゴリー（一二三 2002、柳田 2011を参照）

カテゴリー	定義
情報要求	学習者の発話内容について情報を求めるために質問する
情報提供	学習者に当該語彙項目や情報を与えたりする
あいづち	あいづちで学習者の発話を促したり、理解を表したりする
理解表明	「あいづち+あいづち以外の言語形式」で理解を表す
確認チェック	学習者の発話を繰り返したり、質問の形で確認したりして、表現と意味を確認する
完成・援助	学習者の発話意図を推測し、学習者の代わりに発話して完成させる
無反応	沈黙や表情で理解困難を示す

表3 CSの項目（方 2010を参照）

項目	定義	
自己解決型	コード	他言語借用、逐語訳、造語などのL1をベースとする調整
	概念	繰り返し、置き換え、説明、再構成といった目標言語に基づく言語的調整
	非言語	図示、ジェスチャーのような非言語的調整
共同解決型	完成要求	直接的/間接的に母語話者に意味の産出の手助けを求める
	確認要求	語彙や形、表現の伝達レベルでの容認可能性、理解の確認を求める
	理解促進	聞き取れなかった発話、理解できなかったことについて聞き返す

* 学習者の反応のコーディングでは「自己解決型」を「自己」に、「協同解決型」を「共同」に略す。

以下はコーディング⁵の例である。この例では、学習者CL4による「コード」の使用で意味交渉が始まった（発話1）。母語話者J4がCL4の意味を理解するために、「理解チェック」の調整を行い、CL4はJ4の調整を受けて「自己解決型」を用いながら反応を示した。

断片1⁶：CSの項目と母語話者の発話カテゴリーのコーディング

番号	話者	発話	母語話者の発話カテゴリー	CSを含む学習者の反応
1	CL4	こうべ {中国語に切り替える} 「ニューズダイシェー（女子大学）」hh		
2	J4	「ニューズダイシェ」？	確認チェック	
3	CL4	え：おん おんなのこ ん [大学 から		自己・概念
4	J4	[あ：こうべじょしだいがく	理解表明	
5	CL4	はい うん じしゅうせい がきます		応答

5. 結果および考察

5.1 母語話者の調整特徴：発話カテゴリー

本研究のデータで、学習者の発話に起因する意味交渉数が171であり、そのうち、発話のやり取りが1回だけの交渉数が51であり（約3割）、2回を超えた交渉数が120であった（約7割）。

ここからは、学習者によって意味伝達の問題が生じた際に、母語話者はどのように調整するかについて分析を試みる。4.2の表2に基づき、1回の問題修復を達成するために、発話のやり取りが2回以上である発話連鎖に見られた母語話者の発話カテゴリーごとの発話数について、「習熟度（2水準）×発話カテゴリー（7水準）」の2要因分散分析を行った（図1）。

その結果、両者の交互作用は認められなかったが、母語話者の発話カテゴリーの主効果が認められた（ $F(1, 24) = 21.7, p < .001$ ）。その後の検定（多重比較検定）から、「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」が他の発話カテゴリーより著しく多いことが明らかになった（ $p < .001$ ）。また、母語話者が異なる習熟

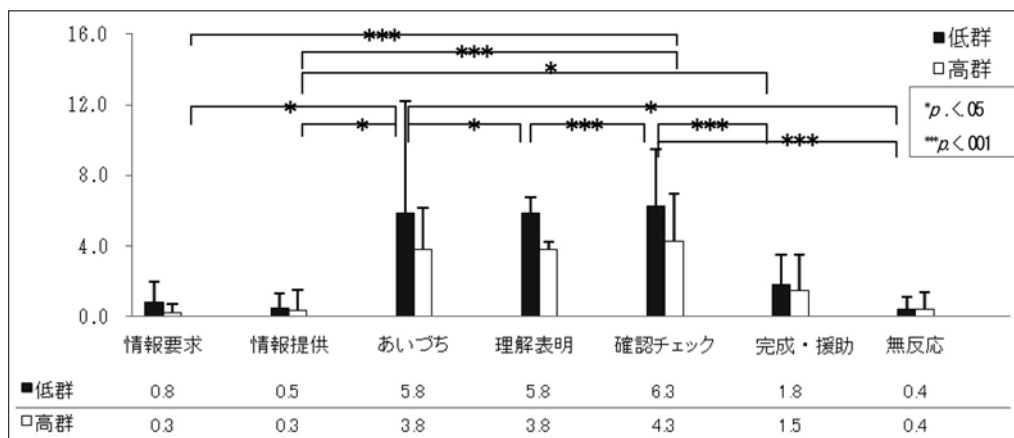


図1 1回の問題修復においての習熟度が異なる学習者に対する母語話者の発話カテゴリーごとの平均発話数

度の学習者に対する発話カテゴリーごとの発話数の違いがみられ、「情報要求」、「あいづち」、「理解表明」、においては母語話者が低群に対する調整頻度（発話数）は高群より多い傾向が見られた ($p = .06$)。

この結果から、まず、学習者による産出の問題が生じた場合、母語話者は学習者に情報を要求または提示するよりも、1) あいづちを多く使用して学習者の発話を促しながら、2) 学習者の発話を繰り返したり、質問の形で確認したりして、積極的に学習者の発話意図を推測して産出を援助し、3) 理解が進んだ時点で明確な理解を表明するサインを出す、という「会話促進型」の特徴が見られる。一二三 (2003: 96) によれば、母語話者は非母語話者と会話をする際、同じく母語話者との会話よりも「情報要求」と「確認チェック」を多く行うが、「情報提供」はあまり行わず、情報を正確に共有することに努める傾向がある。本研究でも一二三 (2003) と似たような特徴が見られたが、母語話者は直接学習者に情報を求めるより、あいづちや確認チェックを頻繁に行い、会話を促進しながら情報の共有を慎重に進めるといった特徴も浮かび上がった。

断片2では、低群学習者CL3の「百文」という語彙産出の問題に対して（発話1）、母語話者のJ3は「うん」を2回打ち（発話2；4）ながら、CL3の調整を待っていた。そして、J3はCL3の語尾の引き伸ばし（発話5）や、5秒ほど沈黙しているCL3の反応（発話7）から、CL3の調整に困難が生じたことを察し、積極的に「確認チェック」を行った（発話6；8；12）。次に、J3はCL3の発話1に現れた言葉「毎週」を拾い、CL3に補足してもらった新情報、「翻訳の」、「ひやく：ぶん」に基づき推測し、漸く「百文」という言葉に辿り着いた（発話12）。最後に、J3は質問の形でCL3に情報を求め、意味交渉の収束を促した。

断片2：低群学習者のCS使用に対する母語話者の調整（授業の宿題について）

番号	話者	発話	母語話者の発話カテゴリー
1	CL3	でも ん 毎週は ひやく：ひゃひやくひやくてん↑	
2	J3	うん	あいづち
3	CL3	ひゃひやくてん {首を振る}	
4	J3	うん	あいづち
5	CL3	ひゃひやくぶ：	
6	J3	ひやく：[じ↑ですか？	確認チェック
7	CL3	[ひやく：ん：(5秒) [ん	
8	J3	[{体を相手の方に寄せる} 毎週	確認チェック
9	CL3	毎週 翻訳の：	
10	J3	うん	あいづち
11	CL3	{机の上に文字を書きながら} ひゃひやくてん：ぶん	
12	J3	うん 百文？	確認チェック
13	CL3	{首をかきあげながら中国語に切り替える} 「イーバイガジュズ(百の文)」ひゃひやくてん	
14	J3	やるんですか？ 翻訳しますか？	情報要求
15	CL3	はいhhh	
16	J3	あhhhh毎週宿題があるんだhh	理解表明

佐々木 (2006) は、異文化状況では、非母語話者が情報を提供する際に、母語話者の「途中あいづち」が有意に多く見られたことは母語話者が非母語話者の発話を励ますためだとしている。また、柳田 (2011) によれば、接触経験の多い母語話者は意識的にあいづちを多用し、積極的に理解を示す傾向がある。本研究でも、このような特徴が見られた。これは本研究の会話参加者である母語話者は全員非母語話者との接触頻度が高いため、非母語話者と意味交渉をする際には相手の困難を察し、意識的にあいづちを多用した可能性が高い。

さらに、「情報要求」、「あいづち」、「理解表明」において、低群に対する母語話者の調整の頻度（発話数）は高群より多い傾向が見られたことから、習熟度の低い学習者に対して、母語話者がより多く情報のやり取りを行い、肯定的且つ明確な反応を示しながら意味交渉を促進する、という学習者の習熟度に配慮した調整の特徴がうかがえる。断片 2 の発話 14 では、J3 は語彙の発音の調整に集中している CL3 に対して、情報要求の質問で文全体の意味を確認しながら意味交渉の収束を促している様子が見られた。このことから、習熟度の低い学習者を相手に交渉を行う際、母語話者は学習者から受けた情報を整理し、会話を成立させるという言語ホストの意識が強まる可能性があることが示唆される。

5.2 母語話者の調整の影響を受けた学習者の再調整

本節では、意味交渉の中で、初めての CS 使用後に母語話者が行った調整に対して、受け手の学習者がどのような反応を示し、再調整を行うかについて考える。4.1 の図 1 に示されているように、「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」が他の発話カテゴリーより有意に多く、また「情報要求」、「情報提供」、「無反応」のいずれも 1 回の問題修復においての平均発話数が 1 以下であったことから、ここでは「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」に後続する学習者の反応に焦点を当てて分析する。母語話者の調整に後続する学習者の発話を永田・大浜 (2011) の枠組みを参考にして分析した結果、以下の 8 タイプの反応が観察された。なお、以下の会話例では母語話者の調整カテゴリーを【】で、学習者の反応を___でそれぞれ示す。

まず、母語話者の調整に対して再調整を伴わない反応は、「応答」と「回避」である。

(1) 応答：母語話者の推測や問いかけに肯定的または否定的な返答に止まる発話。

○承認

C	たぶん あの 中国に留学すること (.) もしあなたは自分で選んだどのに大学 えらん 選びますか? 中国で
J	(1 秒) あっ中国: で留学するとしたらどのの大学に? 【確認チェック】
C	はい

○否認

C	わたしも母に これ {琵琶を弾くしぐさ} これわかった?
J	これ何だ? ギター? 【確認チェック】
C	{手を振る} うんん ちがちがう

(2) 回避：母語話者の調整に反応を示さず、問題の修復を回避する発話。

C	湖南省は え (1 秒) だいき ↑ いいえ ン なんとって
J	だいき? 【確認チェック】
C	ん わたしは湖南省の天気は沖縄の天気より乾燥と思います

次に、CS 使用を含む再調整を伴う反応として、以下の 6 タイプが見られた。

(3) 自己解決型・コード：他言語借用、逐語訳、造語などの L1 をベースとする調整を行う。

C	ん まいつきの {中国語に切り替える} 「ジャーチャー (休み)」
J	{首を傾げる} 【無反応】
C	ん: {中国語に切り替える} 「ファンジャー (休みになる)」 ン 夏に夏休みとか

(4) 自己解決型・概念：繰り返し、置き換え、説明、再構成など目標言語に基づく調整を行う。

C	私の故郷の料理は 浅い感じ?
J	うすい? 【確認チェック】
C	さっぱりした感じ

(5) 自己解決型・非言語：絵や文字、物まねをして意味を伝える。

C	ん こう 少年者はよく お金を { <u>お金入れるしぐさ</u> } 中に
J	うん【あいづち】
C	ほしいものも買えに 買えに 買える 買うために { <u>お金を入れるしぐさ</u> } 入れる

(6) 共同解決型・完成要求：直接的／間接的に母語話者に意味の産出の手助けを求める。

C	夜はhh入学教育という ん：(1秒) クラス クラスを受けます
J	え：その入学教育というクラスの内容は どんなものなんですか？【情報要求】
C	ん：：{視線を下に向ける}

(7) 共同解決型・確認要求：語彙や形、表現の伝達レベルでの容認可能性、理解の確認を求める。

C	わたしも音楽がすぎです 今日日本の ん：(1秒) 「パフィムズ (バンド名)」 { <u>相手を見る</u> }
J	あ：：【理解表明】
C	え 「パフィムズ」はわかりますか？

(8) 共同解決型・理解促進：母語話者の調整発話に不完全理解が生じた部分を聞き返す。

C	ん：： <u>英語は ん 昔から とても あ：</u>
J	苦手？【完成・援助】
C	にがて？

この8つの反応タイプに基づき、母語話者の「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」の後に見られる学習者の反応のタイプ別の割合を示したものが図2である（枠で囲んでいるタイプは低群と高群の間に有意な違いが認められたタイプである）。

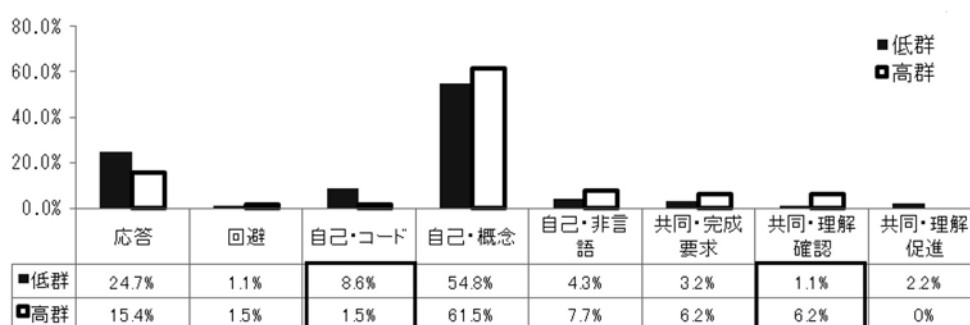


図2 母語話者の「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」に後続する学習者の反応のタイプ別割合

図2を見ると、まず、母語話者の「あいづち」、「理解表明」、「確認チェック」、「完成・援助」の調整に後続する学習者の反応のうち、学習者は「応答」または「回避」を行う割合が全体の30%以下であった。言い換えると、学習者の反応のうち、7割以上はCSを用いて再調整する反応であることが分かった。また使用されたCSのうち、「自己解決型・概念」がいずれの群においても半数以上の割合を占めており、最も多く見られた。このことから、習熟度にかかわらず、学習者が再度の調整を行う際に、目標言語に基づくCSを多く使用する傾向にあると言える。

断片1では、「女子大学」という語彙の生成をめぐる交渉が始まり、CL4はJ4からの問いかけに応じて2度目の修正では日本語を用いて説明を加え、意味の伝達を試みる（発話3）。

このように、低群学習者でも、母語話者の調整を受けることで、自ら使用したCSを評価し、異なるCSに切り変えて再調整することができる。また、そこから効果的な修復の方法についての気づきを得る機会が生まれるだろう。

次に、「自己解決型・コード」において、低群学習者は高群学習者より有意に多く使用することが確認された ($\chi^2=5.3, df=1, p<.05$)。これは学習者のL2習熟度による影響を受けた結果だと推測されるが、藤長 (1996)

断片1 (再掲) : 低群学習者の再調整 (日本の大学からの実習生について)

番号	話者	発話	母語話者の発話カテゴリー	CSを含む学習者の反応
1	CL4	こうべ {中国語に切り替える} 「 <u>ニュウズダイシェー (女子大学)</u> 」 hh		
2	J4	「 <u>ニュウズダイシェ</u> 」 ?	確認チェック	
3	CL4	え： <u>おん おんなのこ ん</u> [大学 から		自己・概念
4	J4	[あ： <u>こうべじょ</u> しだいがく	理解表明	
5	CL4	<u>はい</u>		応答

に指摘されたように、「学習者が聞き手との間に目標言語以外の共通語が存在する場合には、それに依存したコード・スイッチングが多くみられる」という可能性も考えられる。本研究の会話参加者である母語話者のほとんどが半年以上の中国語学習歴を持っており、一定の口頭運用能力を持っていると推察される。それを知った学習者が修復に困難を感じた時に中国語に切り替えることはその場の状況を把握した上での判断だと思われる。一方、「共同解決型・理解確認」において高群学習者は低群学習者より有意に多く見られることが確認された ($\chi^2=5.1$, $df=1$, $p < .05$)。このことから習熟度の高い学習者は再調整を行う際に、「共同解決型・確認要求」を用いて母語話者の理解の度合いを確認する傾向があるといえる。次の断片3では、CH1が「沖縄は秘境ですか」とJ1に尋ねようとする際に「秘境」という語彙の産出に問題が生じた。CH1は発話3で修正を試みたが、アクセントの問題でJ1に理解してもらえなかった。発話5ではCH1は語彙の漢字を分けて日本語で説明を加えた上で、「わかりましたか」と全体的な意味の伝達についてJ1に確認を行った。このようにCH1はL2の置き換えで再調整を締め括るのではなく、J1の理解の度合いを慎重に確認を行い、重層的なCS使用連鎖を行っているといえる。

春口 (2004) によると、上級学習者は言語ホストとなるだけの能力を有し、その行動には日本語母語話者に準じた調整ストラテジーも確認できるという特徴がある。断片3においての高群学習者の一連の調整からも、CS使用の結果についての再確認を行うことで修復を完了する、という高群学習者の相手の理解の受容度を配慮しながら会話の流れを管理する言語ホストとしての役割意識がうかがえる。

断片3 : 高群学習者による「確認要求」(「秘境」という言葉について)

番号	話者	発話	母語話者の発話カテゴリー	CSを含む学習者の反応
1	CH1	沖縄がとてもいいです <u>ききょう</u> ↓ですか？ hhh今日は新しい単語を学んで「 <u>ききょう</u> ↓」		
2	J1	「 <u>ききょう</u> 」ですか？	確認チェック	
3	CH1	<u>ひきょう</u> ↓		自己・概念
4	J1	<u>ひきょう</u> は何なんですか？	確認チェック	
5	CH1	秘密の秘 国境のきょう		自己・概念
6	CH1	わかりますか？		共同・確認要求
7	J1	秘境 わかりますわかります	理解表明	

6. まとめ

本研究は習熟度が異なる学習者による発話の産出問題が生じてCSが使用された場合、母語話者が行う調整と母語話者の調整に後続する学習者の反応について量・質的に分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、母語話者が行った調整には、1) あいづちを多く使用して学習者の発話を促しながら、2) 学習者の発話を繰り返したり、質問の形で確認したりして、積極的に学習者の発話意図を推測し産出を援助し、3) 理解が進んだ時点で明確な理解表明のサインを出す、という「会話促進型」調整特徴が見られた。また、母語話者は学習者の習熟度に配慮し、特に習熟度の低い学習者を会話相手にする際にはより多く情報のやり取りを行い、肯定的且つ

明確な反応を示して意味交渉を促進し、会話を管理する言語ホストとしての意識が強まる可能性が示唆された。

次に、母語話者の調整に後続する学習者の反応は8タイプが観察され、いずれの習熟度の学習者もCSを用いて再調整を行う傾向が強いことが分かった。また、再調整に使われるCSのうち、目標言語に基づく「自己解決型・概念」が最も多く見られるが、習熟度の低い学習者は母語話者との共通言語を利用する調整も見られた。一方、高群学習者は相手の理解の受容度を配慮しながら会話の流れを管理する言語ホストとしての役割意識がうかがえた。

以上の結果から、母語話者の「会話促進型」の調整は学習者にCSを使用して再調整する機会を提供しているといえるだろう。特に、学習者は母語話者の調整に対応することによって、CSの使用を修正するとともに効果的な問題修復の方法を、進行中の意味交渉から自然に学ぶ可能性が考えられる。従来のCS研究では、意味交渉の達成には学習者のL2習熟度が主に問われており、同じく話者である母語話者による影響、会話者同士の相互作用などについて触られることが少ない。Savignon (2009: 38) はコミュニケーションにおける「理解」は母語話者の言語学的、社会言語的形式的模倣ではなく、関係者間の意味の交渉によって成立していると提唱している。また、本研究の結果から、習熟度の低い学習者でも母語話者の協調的な調整を受け、手持ちの目標言語のリソースを駆使して再調整に臨むことができることが示唆され、実際の接触場面における学習者のコミュニケーション能力の育成に向けて、「相互作用」の重要性をもう一度認識する必要があるだろう。

本研究は学習者の発話に起因する問題の修復のために行った会話者同士の調整の特徴を明らかにしたが、母語話者の発話に起因する問題の修復過程や、学習者と接触頻度が低い母語話者による調整の特徴とその影響を詳細に検討することを今後の課題にしたい。

註

- 1 本研究で扱う「意味交渉」は、Pica (1994: 494) による定義、すなわち「学習者とその会話の相手とがメッセージの理解の困難を予測したり、認めたり、または経験したりする時に起こるインターアクションの修正及び再構築である」(村上 1997訳) に従う。
- 2 本研究では、学習者が自ら話題を切り出し発話を産出する際にCSを使用するターンを「ターン1」に捉えるが、実際の会話連鎖では、母語話者からの質問が「ターン1」に先行し意味交渉が始まる場合もある。
- 3 日本語能力簡易試験 (Simple Performance-Oriented Test: SPOT) は簡単に短時間で日本語能力を測定することを目的として筑波大学で開発された。本研究では難易度の高い「SPOT-A紙」を使い、満点は65点である。
- 4 日本語母語話者の習熟度は外国語としての中国語の習熟度である。また、接触頻度に関しては、週単位の目標言語話者との接触頻度を意味する。平均週2時間ほど母語話者(主に日本語教師)と接している学習者の場合は「低」に、平均週10時間以上中国語話者と接している母語話者の場合は「高」と判断した。
- 5 本研究では文字化資料の10分の1について、セカンドコーダーチェックを行った。その一致度はCohen's Kappaを用いて確認したが、 $K = .8$ 以上という数字が得られた。残りのデータについては筆者がコーディングした。
- 6 会話の断片に現れた記号 太字・イタリック体は問題源/[は発話の重なる開始点/ : は音の引き伸ばし/hは笑い声/{ } は非言語情報/ (.) は1秒以下のポーズ/ (数字+秒) は沈黙秒数/ _ は主な分析箇所を表す。

参考文献

- オストハイダ・テーヤ (1999) 「対外国人言語行動と言語外的条件の相互関係」『大阪大学日本学報』18, 89-104.
- Savignon, S. J. (2009) 草野ハベル清子・佐藤一嘉・田中春美 (訳) 『コミュニケーション能力—理論と実践』法政大学出版局.
- 佐々木由美 (2006) 『異文化間コミュニケーションにおける相互作用管理方略—文化スキーマ分析的アプローチ』風間書房
- スクータリデス, A. (1981) 「外国人の日本語の実態(3)日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45, 日本語教育学会, 53-62.
- 筒井千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際—非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違—」『一橋大学留学生センター紀要』11, 79-95.
- 徳永あかね (2000) 「接触場面における意味交渉での母語話者の発話—PUSHDOWNに注目した分析の試み—」『接触場面の言語管理研究』1 (村岡英裕編), 25-34.
- 永田良太・大浜るい子 (2011) 「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の比較—「繰り返し」と「言い換え」に着目して—」『教育学研究ジャーナル』8, 中国四国教育学会, 41-50.

方 日本語学習者のコミュニケーション方略使用に母語話者の調整が及ぼす影響

- 春口淳一 (2004) 「言語ホストとしての上級学習者の自己調整参加調整ストラテジー — 第三者言語接触場面における会話参加の一考察」『千葉大学日本文化論叢』 5, 千葉大学文学部日本文化学会, 73-86.
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生的学習の可能性—意識面と発話内容面からの考察』, 風間書房
- ファン(1998) 「接触場面と言語管理」, 特別研究 「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」 会議要録, 国立国語研究
- 藤長かおる (1996) 「初中級学習者のコミュニケーション能力についての一考察」『日本語国際センター紀要』 第6号, 51-69.
- 方穎琳 (2010) 「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用—意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に」『言語文化と日本語教育』 39, 122-131.
- 増井展子 (2005) 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化 — 共生言語学習の視点から—」『筑波大学地域研究』 25, 1-18.
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」『世界の日本語教育』 7, 137-155.
- 柳田直美 (2011) 「日本語教育経験のない母語話者の情報とり方略に非母語話者との接触経験が及ぼす影響」『日本語／日本語教育研究』 (2) pp.51-66.
- Pica, T. (1994). Research on Negotiation: What Does It Reveal about Second Language Learning Conditions, Processes and Outcomes. *Language Learning*, 44, 493-527.